

世代を超えた

ESD

2030年の その先へ

記録集

令和5年(2023年)

2月26日 日

13時30分 ▶ 15時40分

会場

豊中市千里文化センター「コラボ」
多目的スペース (豊中市新千里東町1-2-2)

定員 80人

参加費 無料

内容

基調講演:「子どもたちがこの町で暮らし続けていくために」
藤田美保さん(認定NPO法人 コクレオの森 代表理事)

パネルディスカッション:

100年後のありたい姿を描きながら、未来に向けて今必要なことを
ゲストの皆さんと一緒に考えます。

藤田 美保さん(認定NPO法人 コクレオの森 代表理事)

正垣 律子さん(一般財団法人環境事業協会 事業企画コーディネーター)

中川 悠さん(NPO法人チュラキューブ 代表理事/株式会社GIVE & GIFT 代表取締役)

上村 有里さん(NPO法人とよなかESDネットワーク 事務局長
(コーディネーター))

申込方法 2月3日(金)10時から 豊中市電子申込みもしくは電話で先着順 電子申込みはこちらから▶

問合せ 豊中市千里文化センター「コラボ」
TEL:06-6831-4133 FAX:06-6832-4190 E-Mail:senrirenkei@city.toyonaka.osaka.jp



世代を超えたSDGs 2030年のその先へ

SDGsの17のターゲットのうち、子どもを中心に暮らしに直結したテーマを取り上げて、基調講演のもとパネルディスカッションで理解を深めます。昭和～平成～令和と世代を超えて人々がつながり、未来に向かって新たな時代を切り拓いていくために今我々ができることは何か、ご一緒に考えてみましょう。



ふじた みほ
藤田 美保さん

認定NPO法人 コクレオの森 代表理事

小学生のとき『窓ぎわのトットちゃん』を読み、自由な学校に憧れる。その後、小学校教諭を経て大学院に進学し、市民による学校づくりを目指す。2004年に「わくわく子ども学校」(現:箕面こどもの森学園)常勤スタッフとなり、2009年より箕面こどもの森学園校長。2022年よりコクレオの森代表理事。共著に『こんな学校あったらいいな ～小さな学校の大きな挑戦～』築地書館、2013年。『みんなで創るミライの学校～21世紀の教育のかたち～』築地書館、2019年。

一般財団法人環境事業協会 事業企画コーディネーター

環境教育プログラムの企画運営業務に携わって約10年。未来を担う世代に体験を通して環境を学ぶプログラムを多数実施してきた。2021年「食と農から未来を変える」をテーマにしたシンポジウムをきっかけに社会的弱者支援のためのSDGs自然農園事業「あわい農園」を開園。土や植物・いぎものに触れ、自然と暮らしのつながりを感じ、生きる力を育むことをめざしている。



まさき りつこ
正垣 律子さん



なかがわ はるか
中川 悠さん

NPO法人チュラキューブ 代表理事/株式会社GIVE & GIFT 代表取締役

精神科医療機関を経営する母方の祖父、技師装具の開発をする父をもつ。関西の情報誌の編集業を経て、株式会社・NPOを起業。さまざまな切り口で情報や地域資源を編集することで、地域コミュニティ・障がい者福祉・農業・伝統工芸など、社会課題の解決を目的とした幅広いプロジェクトを推し進めている。2016・2019年度のグッドデザイン賞を2度受賞。関西大学・近畿大学でソーシャルビジネスを教える。

NPO法人とよなかESDネットワーク事務局長

長野県生まれの東北育ち。自然豊かな場所で育った経験が、現在の環境教育、ESD、SDGsの推進に繋がっています。現在は、子どもの居場所づくりや市民活動の中間支援など、多様な立場の人をつなぐコーディネーションや学びの場づくりを行なっています。また、さまざまな格差が生じている中で、誰もが自分らしく生きることがするための「教育の仕組みづくり」にもチャレンジしています。



かみむら ゆり
上村 有里さん

Access

豊中市千里文化センター「コラボ」

〒560-0082 豊中市新千里東町1-2-2

北大阪急行千里中央駅 北改札より 約80m

モノレール千里中央駅より 約400m

※千里文化センターには駐車場がありません。

ご来館には公共交通機関や近隣の駐車場をご利用ください。



「世代を超えたSDGs 2030年のその先へ」実施要項

【趣 旨】 子ども達に託す未来に「誰もが住みやすいまち千里」を築くため、これからのくらしやまちづくりにとって重要で共有すべき SDGs の理念を中心に据えて、世代を超えて人々がつながり、未来に向かって新たな時代を切り拓いていくために、今我々が考えて行動すべき地域課題の共有を図ることを通して、協働のまちづくりを推進する機縁とする。

【事業名】 千里文化センターフォーラム
「世代を超えたSDGs 2030年のその先へ」

【主催】 豊中市千里文化センター「コラボ」
吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議
とよなかESDネットワーク、とよなか市民環境会議アジェンダ21

【日程】 令和5年（2023年）2月26日（日） 13:30～15:40

【会場】 豊中市千里文化センター「コラボ」 多目的スペース

【内容】 **基調講演** 「子ども達がこの町で暮らし続けていくために」

認定NPO法人コクレオの森 代表理事 藤田 美保 さん

パネルディスカッション

「世代を超えたSDGs 2030年のその先へ」

〔パネラー〕 認定NPO法人コクレオの森 代表理事 藤田 美保 さん

// 一般財団法人 環境事業協会 事業企画コーディネーター
正垣 律子 さん

// NPO法人チュラキューブ 代表理事
株式会社GIVE & GIFT 代表取締役 中川 悠 さん

〔コーディネーター〕 NPO法人 とよなかESDネットワーク
事務局長 上村 有里 さん

【定員】 会場：80人

【申込方法】 2月3日（金）～、豊中市電子申込み + 電話、先着順

※ 当日参加者数47人、スタッフ数6人

| | |
|----------------|---|
| <p>司会者</p> | <p>お待たせしました。ただいまから「世代を超えた SDGs 2030 年のその先へ」を開催いたします。この催しは、各分野でご活躍のみなさまにお集まりいただき、新たな未来を切り拓くために SDGs の実践を通して、これからの千里のまちづくりに繋げて、誰もが住みやすいまちにしていく機運を高めようと企画いたしました。</p> <p>私は本日の司会を担当させていただき、吹田市と豊中市が共同で設置しております「吹田市・豊中市千里ニュータウン連絡会議」の山田と申します。どうぞよろしくお願いいたします。</p> <p>フォーラムに入ります前に、お願いがございます。</p> <p>携帯電話をお持ちの方は、マナーモードにするか、又は電源をお切りくださいますようお願いいたします。</p> <p>また、受付でお渡しした資料などの中に「アンケート用紙」がございます。終了後ご記入をいただき受付で回収をさせていただきますのでご協力をお願いいたします。</p> <p>それでは千里文化センターフォーラムの開催にあたり、主催者を代表して田中千里地域連携センター長よりご挨拶を申し上げます。</p>  |
| <p>田中センター長</p> | <p>みなさん、こんにちは。ようこそ千里文化センター「コラボ」にお越しくださいましてありがとうございます。</p> <p>本日は、第 16 回千里文化センターフォーラム「世代を超えた SDGs 2030 年のその先へ」にご参加をいただき誠にありがとうございます。</p> <p>私は紹介のありました、豊中市千里文化センター「コラボ」の田中でございます。主催者を代表いたしまして一言ご挨拶申し上げます。</p> <p>本日のフォーラムは、子どもたちに託す未来に誰もが住みやすいまち千里を築くため、これからのくらしやまちづくりにとって重要で共有すべき SDGs の理念を中心に据えまして、世代を超えて人々が繋がり、未来に向かって新たな時代を切り拓いていくための必要な方策をみなさんと一緒に考えていこうとするものです。</p> |

はじめに、認定NPO法人コクレオの森の藤田さんに基調講演をいただき、その後にとよなかESDネットワークの上村さんのコーディネートで、パネルディスカッションを行います。

各分野でご活躍のパネリストのみなさんからは、それぞれの活動に触れていただき、その後主題に迫るお話を深めていただく予定となっております。

このフォーラムが出逢いの場、繋がり場となりますよう、またみなさんがまちづくりの主体者として、これから地域活動をはじめご自身が未来に向けて出来る取り組みをすすめていく機縁となりますことを願っております。本日は、最後までどうぞよろしくお願いいたします。

司会者

ありがとうございました。

それでは早速フォーラムを始めさせていただきたいと思います。

テーマは「世代を超えたSDGs 2030年のその先へ」です。

基調講演を、認定NPO法人コクレオの森 藤田美保さんをお願いいたします。拍手でお迎えください。

藤田美保さん

NPO法人コクレオの森の藤田です。今日はどうぞよろしくお願い致します。基調講演と言っていますが、これからいろんなパネリストのお話もありますので話題提供ぐらいのかたちで、SDGsの考え方をみなさまにシェアできたらいいかなと思っています。

私たちは箕面にある団体で、設立して来年度で20周年になるんです。私たちの出発点は、なんとここなんですよ。

「大阪に新しい学校を作りたいよね」と20年前に集まった団体で、大阪のいろんなところからメンバーがいたんですね。千里中央は交通のアクセスが良いということと、「コラボ」になる前の旧の千里文化センター。今は箕面の小野原に建物を持っていますが、持っていない時にここが駅近でミーティング後にすぐ電車に乗れるし、いろんなところからのアクセスも良いということでコラボの前身の千里文化センターで月1回ずっと。



2年間ぐらいここでずっとミーティングをしていました。そんな場所で20年後に、こうやってみなさまと時間をご一緒できるとは当時は夢にも思わなかったなあと感慨深い思いでいます。

あれから20年経ち、このへんもすごく様変わりしましたし、ネット社会や子どもたちを取り巻く環境もすごく変わったと思います。

今日は100年後の未来を考えていくにあたって何を残していけばいいだろうとみなさまと一緒に考えていけたらと思います。

これは私たちが、こういう生き方をこれからやっていけばいいんじゃないか、こういうことを私たちはやりたいねということを描いたものです。



子どもの主体性を育むような教育を主にやっています。小野原にある「箕面こどもの森学園」です。デリチユースの近く。

できれば2校目を作りたいなと思っています。

見てこんな感じというよりは、概念的に手作りの、自分たちの手の中にいろんなものを取り戻していくということが持続可能な社会のために大切んじゃないかと思っています、そのうちの1つに「教育」があるんじゃないかと私たちは思っています。

たとえば「電力」もそうですよね。どこか遠いところで分からないやり方で作られたものに私たちは慣れすぎてしまっていると思うんです。「医療」もそうだし「福祉」もそう。「食」もそうだと思います。

お金を払って何かを買うとか、お金を払ってサービスを得ることに慣れすぎてしまっていて、「消費者」というものに私たちはさせられてしまっているのかなと。

明治以前は私たち自身が作り手であったんじゃないかなと思います。

一人一人が作り手になれる部分、作り手に戻っていけることが、子どもたちに手渡す未来としていいんじゃないかと思っています、私たちはこういうものをイメージ図として持っています。

私たちの活動は後で紹介させていただきますので割愛します。
子どもたちの教育もやっていますが、大人の学びや子育て支援、まちづくりのようなこともやったりしています。

学校は小野原にあるので、ご関心があればぜひ見学に来てください。
今 70 名ぐらいの小中学生が学んでいます。

なぜ私がこういったことをお話するようになったのかといいますと、私たちの学校は持続可能な未来を育てゆく市民、子どもたちをシチズンシップを図っている学校ということで国連のユネスコから認定を受けています。さらに学校の幸せというものを検証していくようなパイロットスクールにも選ばれました。

そういった関係から、一般の方にも SDGs をお伝えすることを時々やっています。

大阪・関西万博も始まるので SDGs については皆様ご存知だし、阪急電車に SDGs トレインもあります。

カラフルなアイコンで 17 のゴールがあるんですね。そこを 2030 年まで目指していきましょうと。SDGs はみんなで目指す 17 のゴールなのかということなんですよね。

遠いことだと思ってしまうと、17 のゴールのために「貧困をやらなくちゃ」とか「気候変動をやらなくちゃ」になってしまいましたが、そうじゃなくて私たち一人一人が願う、望む未来で良いのであって、それは 17 のどこだろう、ここかな？と当てはめるだけでいいんですよね。

17 が先にあるって目指していくというよりは、一人一人の中で大切にしているものをお持ちだと思うので、そこにそれぞれが注力していただくことでいいんじゃないかなと思っています。

SDGs は国連で 2015 年にできたんですね。

国や議員さんが一生懸命やっていく部分もありますし、会社でもやらないと投資が回ってこない。企業努力として見せていかないといけない。バッジだけを綺麗なスーツに付けてはる方が多くて、大丈夫かなと時々心配になることもあるんですけど。

一生懸命がんばっている人のためにあるものでもなくて、まず自分の手の中に、自分の中にある思いがすごく大事で、誰かがやってくれるものじゃないんですよね。

私の手の中、皆様一人一人の手の中に何があるのかなと今日は考えていただけたらと思っています。

早速ですが、私たちはどんな未来を望んでいるだろうと。お近くの方とどんな未来を望んでいるかお話いただいてもいいですか？1 分半ぐらいかな。

ありがとうございます。

やっていく時にいざ何かをやろうとすると、揉めますよね。
みんなで川のゴミを拾っていこうよと言っても「何曜日にするんだ」「どのゴミをどうやって拾うんだ」「拾ったゴミはどうするんだ」といろんな意見が出ますよね。私たちもそうでした。
「子どもたちが生き生きできる学校を作ろうよ」と千里文化センターで。椅子の部屋が取れないと和室でもやってみました。その時も「私はリンゴがいい」「いや星がいい」と。
同じ色を見ててもいろんな側面があって、サイコロを見ているみたいなものですね。「私は月に見える」とか「星だと思う」と。
自分の意見を出して相手の気持ちを聞きますが、お互いが主張しても仕方ないことなので、ここから大事なのは自分を飛ばす。幽体離脱みたいな感じがすけど、「リンゴだ」と言ってる自分を俯瞰してみる。鳥の目とといいますけど、ちょっと引いて見てみる。皆様はしているかもしれません。
引いて見ると、「ハートならみんなが言ってるものに合わせるよね」「こういうふうにしていこうよ」と生み出すことが何かをやっていく時に大事だし、私たちが平和のために、これからの未来のために一歩を進めていく時にもこういうことを地道に積み重ねているのかなと思います。
ただ、これができる人には条件があるのかなと私たちは思ってるんです。誰にもできるわけじゃなくて、「自分ばかりしてるの嫌やな」とか人ばかりを責めたり、あるいは「自分なんてダメだ」とか。そういう感じだと、難しいんですね。まずは一人一人が満たされることがすごく大事。
SDGs の話をすると「困っている人がいるんだから、早く人を助けに行かなくちゃ」とか「気候変動だから早く自分が出す CO2 を減らすんだ」となるんですが、自分が満たされてないのに頑張るってなかなかしんどい。まずは人を助けに行く前に、ご自身を満たすことがすごく大事だと思っています。自分自身が安心安全に過ごせる場所があるとか、自分自身が誰かから信頼されてる、大切にされてるとか。あるいは失敗しても大丈夫なんだという気持ちを持っていたり、中途半端でも OK なんだよねという気持ちがあると、いろんなことをやってみたり引き受けたりできるかなと。
私たちは、このことを子どもたちには大切に思っていて。子ども時代にこういったことを育めばきっと大人になった時に何かをやってみたい、何かを引き受けたいという人になっていくんじゃないかなと思っていて、私たちの学校ではカリキュラムに入れて子どもたちが育つようにと考えてやっています。
自分の世界がどんどん満たされていくと勝手に人は役立とうとするし、それを分かち合おうとするので、何かを引き受けようとかやってみよう勝手になっていくんですよね。
個人の意識が変容したら、個人の行動が変化する。当然それは周りの社会を変化させていく。

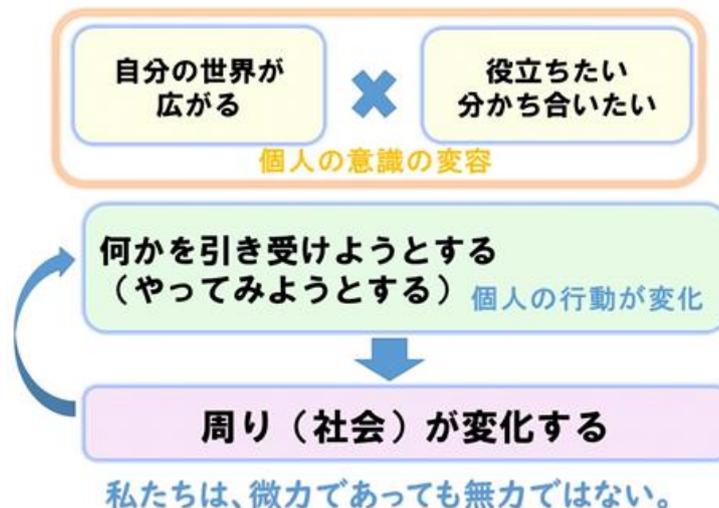
ここがぐるぐると回れば、あまり 17 のゴールとかは気にせずにここをやっ
ていけばいいとなっていくんですよ。

私が何かをやってもウクライナの戦争は止まらないんじゃないかと。そりゃ
そうですよね。

「私たちは微力ではあっても無力ではない」という言葉があります。
私が聞いたのは、原爆が落とされた長崎で平和についての活動をしている高
校生のグループがあり、その高校生たちがある大会で言った言葉です。

「私たちは微力だけど無力ではない」それは高校生たちに限ったことではな
くて、私たちも何かをやってもたいして大きく変わらないですよ。気候変
動が止まった感じもないし。

何もやらないとゼロですけども、何かやれば 0.00001 ぐらいかもしれないけ
ど、それに掛け算すれば。0 かもしれませんが、それが集まれば一歩になっ
ていくので、何かをやっていくということは決して無意味なことではないん
じゃないかなと思います。



人類が黒目を小さくさせたわけがあって、これがこれから私たちの社会や
世界を考えていくうえで大切なんじゃないかなと思っていることなんです。
テレビでご覧になった方がいるかもしれません。NHK チコちゃんですら
しいんですよ。

チンパンジーや犬、猫など動物に白目はありますが人間みたいに白目を出し
ていないんですよ。人間だけが進化の過程で黒目を小さくさせて白目を見せ
てるんです。

私たちの先祖や動物にとって何を見ているのか、どこを見ているのかとい
うのはすごく生存に関わることだったんですよ。

何を見て、どこを見ているのかが相手に伝わると食べられてしまう。捕食動
物であれば食べられてしまうし、食べるほうからも何を見ているのかわかると
逃げられちゃう。

相手がどこを見ているかを伝えることは弱さだったんですよ。

ところが人間というのは、サルからヒトになっていく過程で弱さをさらけ出すことが逆に強さなんだと気付く。二足歩行になって道具などを手にする時に分業社会みたいなことが起きていて、「今こっちを見てるからお前はこっちを見とけよ」とかアイコンタクトをとる。仲間と手を取り合ってやっていくことの強さになって、オオカミなどいろんなものから身を守ったり、マンモスを倒すときにも役立っていたんじゃないかと思います。SDGsには17のゴールがありますが、それをパートナーシップで実現させなければ実現できないと言われていました。それぞれの皆様が望む未来があると思いますが、それを一人一人がやっていくのはもちろんですが、「私こういうことをやってる」とか「こういうことをやってるけどできないから助けて」「こういうことなら私はできる」とコミュニケーションをとってパートナーシップを作っていく。繋がって手に手を取り合ってやっていくことでこそ初めて実現できると言われていています。なので私たちは常に繋がって生きるんだということを、進化の過程の中で選んで生きてきている動物になります。この後もお隣の方とお話をする機会があると思いますが、ぜひ繋がりを作っていただいて、千里のまちで何ができるのかを次のパネルディスカッションでも考えていただけたらと思います。ありがとうございます。

司会者

ご講演ありがとうございました。
それでは場面転換の後にパネルディスカッションを始めます。用意ができるまで少々お待ちください。

上村有里さん

後半のパネルディスカッションに入ります。
先ほどの藤田さんを中心に4人で進めていきます。よろしくお願ひします。まずはそれぞれのパネラーのみなさまが普段どのような活動をされているかなどの自己紹介が前半です。その後にそれぞれがやっている中でモヤモヤとすることについてお話しいただきます。先ほどの藤田さんが子どもたちのモヤモヤを図で示してくださって私もなるほどなと見ていました。皆さん最前線でいろんなことをしているだけに、いろいろなモヤモヤがあるようで、そのあたりはみなさまも共感できるところがたくさんあるのではないかと思います。
モヤモヤを話していただいたあとに、未来をどうしていくか。今日のタイトルにありますようにSDGs2030の先、今日は思いきって100年後の未来をどうしていくかを皆さんといっしょに考えていく時間にしたいと思っています。

私は「とよなか ESD ネットワーク」という NPO を運営しています事務局長の上村です。よろしくお願いします。

先日、豊中市の南部にできた「庄内コラボセンター」の中に、市民公益活動支援センターができました。その委託運営をしております。市民活動のことやボランティアの相談、中間支援という間を繋ぐ活動をしておりますので、いろんなところを紹介してほしいと思われたらぜひ「ショコラ」にいらしてください。ショコラと言ってもチョコレート売っているわけじゃなくて、庄内コラボセンターでショコラという愛称が付いています。それでは、パネラーのみなさまそれぞれに紹介頂こうと思います。まずは藤田さんから引き続きお願いします。



藤田美保さん

先ほどから引き続いてココレオの森の藤田です。

私たちが千里文化センターでミーティングをしていた頃は「大阪に新しい学校を作る会」という団体で、新しい学校を作りたいよねと 20 年前に集まりました。

それにはいろんな理由がありますが、私自身は子どもの頃に人から決められたことをみんなと同じようにやっていくことがおかしいなと思ってたんですね。でも学校ってそういうところだから行かないといけないと親に言われて行ってたんですけどね。

本を読むのが好きで、やたらと読み書きができる子だったんです。なので小学校の授業が合わないといいますが、全部知ってることをずっと座って。宿題も書ける漢字をただひたすらに何個もノートに。書けるのにやらないといけないのはおかしいなとずっとと思ってたんです。

そんなときに黒柳徹子さんの「窓ぎわのトットちゃん」という本をたまたまいとこの部屋で見つけて読んだのをきっかけに、こんな学校あったらいいなと思ったんです。まさか創ろうとは思わなかったんですけど、たまたま仲間と出会って。

納得がいかないものがあるのであれば、自分たちの手で作ってもいいんじゃないかなと。

日本では市民が学校を創るということは、今ではたくさんありますが、当時は珍しいことでした。海外では市民が学校を創るのはけっこう普通のことなんですよ。いろんな制度がある。

私たちが学校を創ってみて分かったことは「なんのために学校を創りたいんだろう」ということだったんですね。

最初は「子どもたちが生き生きと学んでほしい」とかだったんですが、だんだんと、一人一人が学校教育で大事にされるように、一人一人が大事にされる社会を作りたいから、一人一人が大事にされる学校を創りたいんじゃないかなと思うようになりました。



今日も SDGs のお話をさせていただきましたが、子どもたちにこれが大事だと思ってやることが実は子どもだけじゃなく大人にも通じる話なんだなと思うようになり、私たちの学校を卒業した子どもたちが自分に自信を持って伸び伸びと自分はこうだよねと思うことを貫いて生きていってほしいという思いがあって、望む社会をみんなで創っていくことをやればいいんじゃないかなと思うようになりました。

その他の主な事業としては、子育て広場の業務委託を受けています。豊能町で子育て世代の方がお子さんの自己肯定感を大切にしながら子育てできるような環境を整えたり。

豊能町の隣に川西市がちょこっとだけあるのをご存知ですか？妙見山のケーブルカー乗り場の辺りに川西市が飛び地みたいなカタチであるんです。その黒川という地域で、子どもたちの里山活動を始めたら「里山センターをやりませんか？」という流れになり、4月からセンターの指定管理をしています。

子どもの教育から始まっていますが、どんなまちになったらいいのか、どんな社会だったらいいいのかを、子育てや里山保全、地域の方とのコラボレーションをやりながら考えている団体です。

| | |
|---------------|---|
| <p>上村有里さん</p> | <p>2校目をどこかに作りたいと探しています。もし耳寄り情報があればぜひ教えていただきたいなど。</p> <p>ありがとうございます。 なければ自分たちで作ろうという。ほんとに作っちゃうところが素晴らしいなと思います。 教育というのはまちを作っていく、まちづくりだという話に納得しました。子どもだけで頑張るのではなく、大人たちもキラキラと楽しそうにやっていくのは大事だなと、藤田さんが楽しそうに話しているのを見て実感するお話でした。</p> <p>続いては正垣さん、よろしくお願いします。</p> |
| <p>正垣律子さん</p> | <p>私たちは環境問題を伝えるイベントや講演会をしている会社で、一般財団法人環境事業協会というところで事業の企画コーディネーターをしている正垣律子と申します。よろしくお願いします。</p> <p>私自身は教育者でもなく特定の環境分野の専門家でもないのですが、地球をもうちよっとよくしたいなと思って生きています。</p> <p>私たちは環境問題をまず自ら学んでそれを人に伝えて、参加していただいた方が行動を変えることを目的に。私たち自身が好奇心と向上心を持って取り組んでいます。すごく楽しい仕事です。</p> <p>環境学習を通して社会を変えたいと思っています。</p> <p>どんなことをしているか、紹介させていただきます。</p> <p>去年、大阪市内の小学生の親子向けに水をテーマとした体験型のイベントを開催しました。</p> <p>私たちの永遠のテーマは「どう無関心層に環境のことを伝えるか」です。そこに楽しいワクワクするようなことやアクティビティを取り入れて、生き物のことや海洋プラスチック問題、環境のことを伝えようと企画しました。1回目は和歌山のラピュタの島として有名になった友ヶ島に行きました。綺麗な無人島を探検していきます。この海岸には大阪湾の海流に乗って、大阪湾のゴミがそこを通るため、たくさんの海洋ゴミが打ち上げられます。外国から来たペットボトルや漁業で使われる漁具もたくさんありますが、納豆の容器も落ちてたりするんです。</p> <p>子どもたちと「海に来てほんとうに納豆を食べたのかな？」と考えて、違ふよね。</p> <p>私たちの生活の中から河川を通じて海に流れて無人島の綺麗な島に打ち上げられているということを体験で学んでもらいました。</p> <p>その後、じゃあ水が生まれるところはどんなところだろうとリバートレッキングというアクティビティで、水を触って冷たさを感じたり、水の中に入って流れを感じたりするワクワク体験をしてもらいました。</p> |

保護者の方たちも楽しんでいただいて。親が楽しいっていいですね。子どものために何かをするのではなく親も楽しみながら学ぶのは大切だなと。最後に行ったのは、私たちに身近な都市河川の水環境ってどんなところだろうと。上から見るのではなく実際に水に降りてサップボードを使って。



ここは道頓堀です。飛び込むとお腹を壊すと言われている水に実は生き物がたくさんいるんじゃないかと。もんどりという仕掛けを使って2~3時間置いておくと、カニや亀とか海と川を行き来するような生き物がたくさん捕れたんです。

こんなに生き物がたくさんいる環境ならやっぱり水を大切にしなければいけないよね。汚しちゃいけないよねと。子どもたちは生き物が大好きなので、大事にしようと感じてもらいたいイベントです。

このイベントはこれで終わらなくて、学んだことを子どもたちがアートを作って本にしました。皆様のお手元に配らせていただきました。友ヶ島で拾ったゴミを使ってその時の感情をアートにしてくださいと課題を。対象は小学校の低学年だったのですが、皆さんすごく発想がすばらしくすごく良い作品ができました。保護者は子どもの作品にポエムを作ってもらいます。それも感性豊かな方たちが多くて、すごく良い作品ができたなと思っています。

子どもたちに「誇りを持って自分たちの体験をお友達に伝えてね。伝えるぶんだけ印刷するから」と。「じゃあ100冊欲しい」とみんな張り切って保護者の方やみんなに伝えていただくことになっています。

体験してそれを伝えるところまでをやっていきたいなと思い、こういう企画をさせていただきました。

こういう子ども向けのもの以外にも、幼児期の指導者向けに環境学習を保育園の日々の保育の中にどう取り入れていくかという講座も運営しています。環境教育や大学生といっしょに再エネの研修。都市公園の中に再生可能エネルギーをどうやって取り入れるかを研修したり。

大人向けにもSDGsツアーを最近、連続でやっています。

そんな楽しみながら学ぶようなことを企画しています。

そんな伝えることを仕事にしている環境事業協会ですが、2021年に農園を開きました。「あわい農園」といいます。

「あわい」というのは「間（あいだ）」という意味があります。農園にしたきっかけはシンポジウムでした。伝える側から実践者になりたいという思いが強くありました。

社会的弱者と呼ばれるちょっと大変な思いをされている方が元気になって帰ってもらえるような、そんな支援のための農園を作ろうと動き出しました。いろんなところを探したのですが、都市の中で農園ができるところが少ない。農家じゃないと農園を借りられないと言われてたり、いろんな課題があったんですけど、いろんな繋がりの中でベストな場所をゲットしました（笑）花博記念公園、鶴見緑地の公園の中の一角にあります。

ここではSDGsアクションを3つやっています。

都市の循環。都市だからこそ農の中でどんなことができるかなという時に廃棄物の問題があります。ホテルから出る廃棄物や食品残渣を堆肥に変えた、食品リサイクル堆肥を使っています。

自分たちからどうしても出てしまう廃棄物を土に返してそれが野菜になるというのを見ていただいています。

もちろん無農薬無化学肥料で食の安全、地産地消を発信しています。畑ではプラスチックを一切使っていません。

2つ目のSDGsアクションは、子ども食堂の支援になります。

ただ食材を提供するだけでなく、子ども食堂に来ている子は貧困だけではなく土日も親が働いていてなかなか体験の場に行けない、自転車で行ける公園にそういった体験ができる場があればいいなと年に何回か子ども食堂に来ている子どもたちを招いて体験していただいています。植え付けから収穫までの体験をしていただいています。

もうひとつは、働く支援。

大人で引きこもりから脱せない方たち、働きたくてもなかなか一歩を踏み出せない方たちに日々の農園の維持管理に関わっていただいています。

私たちは支援の専門家ではないので、そういうことをしている支援団体と連携して。ステップアップしていくところの1つのプログラムとして農園を活用していただいています。

基本的な理念で、支援する・支援されると区別せず「あわい農園」の中で人と人が繋がったりして楽しく関われる仕組みを作れば、何かいい新しいかたちが作れるのではないかなと思っています。

なので農業の指導者はありません。みんな素人なんですね。私ももちろん素人ですし、スタッフもみんな素人なので考えながらやっています。

プラスチックを使えないし農薬も使えないので、放っておくとキャベツに青虫がすごくたくさん。こんなの「あわい農園」でしか見れない風景です。

ただ、このあとにこのキャベツが復活するんですよ。冬になって青虫が育たない気温になったら丸い大きなキャベツができました。こんな復活するんだと。なんかいろいろやってみて体験して学ぶという農園になってます。

私たちのモットーは、体験イベントもそうですが、楽しいことをする。農園をやってると、いろんな人が集まってくれるんですが、たとえばヨガの先生が来てくださって「ここで子どもたちといっしょにやりたいです」と。農園でみんなでヨガのポーズをとってから農園作業をすることもやっています。

種を植えるとかじゃなく、ひまわりの種がたくさんあるので「みんなで投げよう！」と言って投げるんです。「芽が出たらいいね」と。結局あんまり出なかった。やっぱりちゃんと植えなきゃいけないねと体験して学ぶみたいな。そんなことを子どもたちと楽しみながらやっています。

食と文化が未来を変える仕組みとしてサポーター制度を、この農園では30人ぐらいの農園サポーター、ボランティアが来てくださっています。子ども食堂の体験型イベントをやったり就労支援をやったり。子ども食堂のことだけじゃなく、いろんな人に活動を知っていただきたいので定期的にオープンデーを設けています。

脱プラプロジェクト。プラスチックに頼らない農業も始めました。農業分野からでるプラスチックが海に流れて環境問題に繋がっています。あわい農園では、プラスチック製の防草シートを使わず公園から出る剪定枝を敷き詰めて草を抑えています。蔓ネットもボランティアさんが麻紐で編んでくれるんです。支柱は竹です。近所の竹林から取ってきた竹を使っています。

化学肥料も被覆肥料でプラスチックを使っているんです。肥料成分が出た入れ物はマイクロプラスチックとなり海に流れているので、そういうものも使わずリサイクル堆肥を使っています。子どもたちとバケツリレーしながらチップを敷き詰めたり。

右側の写真がチップを敷いたところ。左が防草シート。防草シートの上に土が張っているの草が生えてきてしまっています。

難しいことも考えたらできるじゃんということを、みんなで考えながらやっていってます。

11月に鶴見緑地のフェスタで、作ったサツマイモを子どもたちに売る体験をさせていただきました。値段を付けるところから。サツマイモ1個を700円で売ろうとするんですね。（笑）全然売れなくて。「なんで売れないんだろう。無農薬と書いてないからか」と無農薬の看板を作ったり。

いっしょに堆肥も配ったのですが、環境のことを伝えたいので「こういう堆肥を使うんだよ」と日々教えていますが聞いてないと思ってたんです。しかし意外と子どもたちが一生懸命に説明するんです。ちゃんと話を聞いてたんですよ。

サツマイモは完売しました。傷だらけのサツマイモも持っていったんですが、それも全部売り切って達成感があったイベントでした。

都市型農園の可能性をすごく感じています。いろんな人が集まって、いろんなことができる。

これをいろんなところに繋げていきたいなと思い、実は先週、農園第2号がオープンしました。

梅田から徒歩15分ぐらいのところにあるビルの谷間にあるような小さな会社の屋上で「あわい農園みたいなことができないか」と企業から依頼をいただき、「Urban City Farm OZ アーバンシティファーム・オズ」。

まちで食と農に触れるの体験スペースとしてオープンさせました。

ビルの谷間の屋上に農園があり、近隣の幼稚園にこういう体験をしてもらったり、仕事帰りのOLさんがちょっとここで涼んだり。

そんな感じのスペースができたらと思っています。



食と農から未来を変えるということで、可能性はどんなことがあるか。やっぱり参加ができるということですね。都市型農園は、まず近い。

近郊農家だとやっぱり限られた人になってしまう。公園にこういうものがあると、参加できる可能性が高い。ほとんど農機具とかを使わないので、手間がかかるので。誰かに必ず出番が来る、主体的に関われる仕組みです。

体験して学ぶので失敗しても全然OK。自然は優しい。キャベツのこともそうですが、枯れかけていても雨で復活することを体験で学べます。

少ない道具や知恵とか、昨日まで全然知らなかったことを知って、小さな成功体験が積み重なる農園です。それって生きる自信に繋がるのかなと思います。

上村有里さん

藤田先生のお話でも「自己肯定感がすごく大事」とありましたが、そういうことを少しずつ体験するような場にできたらと思い、やっています。ありがとうございました。

盛り沢山でした。ありがとうございます。
農業って全部が繋がりますよね。自分が作ったものを人に売るとか食べることで社会と繋がっていくという、まさに体験のバリエーションみたいなことがすごく素敵だなと思いながら聞かせていただきました。
続いて中川さん、よろしくお願いします。



中川悠さん

NPO法人チュラキューブの中川と申します。よろしくお願いします。
チュラキューブと株式会社 GIVE&GIFT という2つの法人を立ち上げています。ややこしいと思われませんが、基本的にやってることは1本です。
伊丹に住んでいます。母親が豊中市内の精神科病院の創業者の娘で、父親が義手・義足の研究者なんです。
子どもの時からおじいちゃんに会う時には精神科病院に行っている人があるんやと思ってたし、農業機械に挟まれて手を失った身体に障がいのある人が我が家に遊びに来たり。障がい者福祉が身近にある家庭環境で育ちました。
僕が20代の頃に、講談社の「KANSAI 1週間」という、角川書店から発行されている関西ウォーカーにとってもよく似た雑誌が2010年まであったんです。

僕自身、その雑誌の編集者をしていたので、僕の職能としては文章が書けたり、インタビューができたり。あとは、デザインやホームページの構成を作ったり、企画することができます。「春が近づいているので、デートコースを16ページで特集したい」とか。「今回のシンポジウムを4ページの冊子にして」ということにも対応できるんですね。
また、今は大学でプロデュースやソーシャルデザインを教えています。

もう1つの活動の軸は、まちづくりです。スライドの左上にあるのは、淡路島での取り組みなのですが、「淡路島で弥生時代の鉄器が発見された」けど、地元の皆さんの興味が高まらない。

でも、歴史的な価値はとても高いので、この歴史的な大発見を観光や市民教育に活用するための日本遺産の取り組みのプロデューサーもしています。

淡路島で活動をしていると、地元の商店街から「移住促進を盛り上げていきたいので手伝ってくれないか」と声をかけていただいて、かれこれ5年間、洲本市の商店街に通っています。

移住の事例を見に行くため、福島県の西会津を訪れたのですが、雪深い山野中の家は、人が住んでいないと雪の重みで家が潰れたり、イタチが入ってくるんですって。

対して、淡路島は気候が良いから、ン十年と当時、おばあちゃんが死んだままの状態の家が保たれていて、顕著な例でいうと、飲みかけのコップがそのまま置いてある状況で時間が止まっていたりする。

空き家があるけど借家がないという問題がある。

淡路島の洲本市では移住希望者がコロナ前に比べると、4倍に増え、貸すための家がないという問題が起きてます。



そんなことをやっていると、奈良県生駒市の市役所とご縁ができて「30年後に人口が減って職員数が半分になるんです」と。神戸市や生駒市は早いうちに知見のある人たちを入れて、外の世界との繋がりが薄い人たちの促進剤になってほしいと。

そこで、月・水だけ生駒に通って市役所職員をしています。当初は、庄内の「ショコラ」のような地域コミュニティのセンターに配属になったのですが、市役所の中に仲間がどんどんできてくると、さまざまな部署の相談を受けられるようになって。7月なかばに部長に呼ばれて「中川さん、誰と会ってもいいですよ。このセンターから市役所本体に異動しましょうか」となり、今は生涯学習、スマートシティ、教育など8部署ぐらい。

いろいろな角度からお手伝いをしている、謎の赤眼鏡でございます。

さらに、育ってきた家庭環境の影響もあり、障がい者福祉の支援にも 15 年ほど、取り組んでいます。

全国的な問題ではありますが、B 型施設の給料（工賃）は平均月 1 万 6 千円。めちゃ低い。それを上げていかないといけない。2007 年にやったのは、親族が経営をしている病院に所属するパンを作っている施設で冷凍のロールケーキを作るということでした。パンを作っても売れなくて廃棄してしてしまうのであれば、冷凍庫を活用して賞味期限を気にせず商品を作れば、ロスがなくなるじゃないかと。クリスマスのケーキは、夏場に大量に作って冷凍保存しているということを活用して、1200 円の冷凍保存ができるロールケーキを作りました。

次に手掛けたのは、お墓参り代行サービス。高齢者がなかなか遠方のお墓にお参りができないという声があって、それを障がいのある人たちが解決するサービスを東京と大阪のそれぞれの施設と連携をして作りました。お墓参りに 1 回行くとお花代込みで 9500 円。お花代を抜いても、必要となる備品は雑巾やバケツくらいなので、実質、5000 円ぐらいが利益が出てくるんです。大阪はね、全国でワースト 1 の工賃の低さなんです。具体的にいうと、12,000 円台。でも、お墓参り代行の仕事をたった 3 回行くだけで、収入は 1 万 5000 円になる。

話を交えますが、現在、取り組んでいることに「シニア食堂の運営」があります。大阪府住宅供給公社という団地の会社から「高齢者が多い団地の 102 号室を中川さんに期間限定で無償で貸すから、高齢者に対してのコミュニティ活動を生み出してほしい」という相談がありまして。

もともとの計画では、地域の福祉施設といっしょにシニア食堂を運営しようという考えていたのですが、なかなか福祉施設は新しいこと、余計な仕事に取り組むだけの余裕がないことがわかってきまして。今は、企業の障がい者雇用で雇われた障がい者スタッフが地域の食堂のスタッフになることで、持続可能な運営を実現するという「ユニリク」というソーシャルビジネスをはじめました。例えば、ビーズクッションで有名なヨギボーが「コロナもあって、本業の中で障がいのある人の仕事を作りづらい」「テレワークの影響もあって仕事がどんどん IT 化していく」と。どれだけ誠実に障がいのある方を雇用したいと思っても、実際の仕事の中で障がいのある人が取り組める仕事を作り出しづらい時代になってしまっているんですね。

でも、子ども食堂、シニア食堂って、人件費を出せるわけじゃないし、助成金も常にもらえるわけではないし、地域の中ではとても必要な存在だけど、人件費に関してはずっと苦勞をしている。じゃあ、ヨギボーさんと一緒に新たな障がい者スタッフを雇用して、企業の社会貢献の取り組みとして、地域の食堂の担い手として育てていけないかと。

今の職場には 3 社 12 名の障害者がいます。

全員、最低賃金の1,050円ぐらい。スタッフのお給料はヨギボーさんたちが自社のスタッフのために払われて、障がいのある社員たちは社会に貢献していくんです。

コロナで数多くの地域食堂が閉鎖になってきたのですが、実際、こども食堂とか地域食堂って人件費が出せないんですよ。だから、基本はみんなボランティア。お金が続かない。

そんなことをやっていると、大学から「非常勤講師をしてくれませんか？」と声がかかるようになりました。

関西大学では社会起業論。社会に役立つことでの会社の起こし方。ソーシャルビジネス。社会課題を解決に繋がる授業をしてくださいと。

近畿大学ではデザインを学んでいる若者たちに向けて、「デザインを作っても売れない時代」「デザインだけでは就職できない」。これからは、自分たちが生み出したもので注目を集めるイベントにしたり、ビジネスに変えていけないといけないとプロデュースについて教えています。

大阪芸術大学のデザイン学科でも同じように、彼らのデザインする力を社会の困りごとに活かしてほしいという授業を担当しています。

さらにさらに、毎日新聞で連載を持っています。「あしたに、ちゃれんじ」という名前で、大阪版と兵庫版で4年半ぐらい続けさせていただいてるんです。毎月1回取材ができるって、とても楽しいんですよ。

6歳の女の子がいます。毎週1回火曜日はゲゲゲの鬼太郎が好きやからキャラ弁を作っています。コロナでミシンを始めて、服を作ることも。ね！謎がいっぱいでしょう？ただ、多動なだけなんですけどね。

上村有里さん

ありがとうございます。

ほんとにキャラが際立っているお三方に来ていただいたという感じですね。

なぜこの方々に来ていただいたかというところが今日は大事なんですよ。

藤田さんのお話にあったように、1つの側面からしか私たちは見れていないことが多い。違うところから見るためには、違うところから見ている人たちを知ったり学んだり。そこと繋がるのがとても大事で、そこを超えていくことがSDGsじゃないかな。

今のお話を聞いただけでなんとなくSDGsが分かったような気になるのではないかと思います。

いいなあと思うお話をたくさん聞いたところですが、それぞれの活動をやっている中でこれでいいのかなあということや、なかなかうまくいかないこともそれぞれたくさんあるようで、そこをどう乗り越えていくかということがSDGsの「誰一人取り残さない」に繋がるのかなと思います。

中川さんが大学で教えている話がありましたが、今の若者たちを見ているといろいろと気になるところがあるということ伺いました。

中川悠さん

お子さんが来年4月から小学生になることで将来に関して危惧していることもあるようですので、今日のテーマ「子どもたちがこのまちで住み続けていくためには」という視点や、子どもや教育、未来といった視点でモヤモヤをご紹介いただければと思います。

うちの子が6歳で来年小学生になります。

通う学校は地元の公立小学校ではなくて、藤田さんがやってらっしゃるオルタナティブスクールというか探究型学校を選んだんです。

ゲゲゲの鬼太郎や水木しげる先生が好きで、2歳くらいからはお地蔵さんに手を合わせる子やったんです。次に、だるまにハマりはじめたり、仏さんにハマりはじめたり。水木しげる先生の本には、ゲゲゲの鬼太郎もそうですが、日本全国の話があったり、戦争の話があったり。教育としても、とても深いんです。家族でも、去年の水木先生の100歳誕生日に鳥取の境港のイベントにいくくらい。大好きなんですよ。

ところが幼稚園のような集団に入ると妖怪好きなほとんどいないので、プリキュアに負けるんです。プリキュアのアニメは話の展開が早いし、お話も子どもの興味を集めるために、よくできている。僕がなぜ妖怪キャラ弁を作っているかという、子どもに妖怪好きを続けてほしいと願っているんですよ。

大きな小学校に入って、30人クラスになると、もちろん、学べる環境はあると思うのですが、同調圧力の影響で、彼女が好きだったものが好きじゃなくなる日が来るんだろうなと。

来年からは六甲山の山の上にある、1学年8人しかいない学校に家族で相談をして、行くことを選びました。

彼女は、僕らが経験したことない道を進んでいくし、学力を高めることより、チャンスが目の前に現れたときに、「やりたいです！」と手を挙げてチャンスを掴んでいくような人生を進んでほしい。

一方で僕は10年ぐらい大学の先生をしているんですよ。勉強をしてきた若者が入学する関大、近大の偏差値は52や55くらい。対して、大阪芸大は勉強嫌いで楽しいことがしたいという全然違うタイプですが、勉強をしてきた学生の多くは、周りの視線を気にして質問があっても手を挙げないんですよ。恥ずかしさもあったり、目立つことを嫌がったり。同調圧力の教育がここに大きく影響してきていると感じています。

また、親御さんの仕事を知っている人？という、8割ぐらい手を挙げますが、話したことある人は？という、2~3割減るんですね。その原因は、僕ら大人たちが子どもたちを前に、仕事を家に持ち帰らないようにしようとしていたからかもしれない。でも、子どもたちにとってのロールモデルや大先輩が家庭の中にいるのに、若者たちは「先生やりたいことが見つかりません。社会人の話なんて、聞いたことがありません」と言ってくる。

最近、珍しいなと感じたのは「推し」という自分の流行りが無いのが悩みと相談をしてくる学生がいること。「先生、推しが見つからないんです」と。みんな同じようなYouTubeを見ているし、みんな同じような曲を聞かないといけない。

それを解決するべく、僕は学生を農業の現場に連れていったり、職人さんのところに連れて行くんです。そしたらね、キラキラと学生たちの目が輝きはじめるんですよ、本当に。「あ、これが社会なのか！」みたいな。おぼろげに見えていた大人の社会、、、霞の世界がここにあったんかみたいな。問題は大人たちが若者に対して、社会というものをなぜ具体的に教えてこなかったのかですよ。



大学は、彼らは就職のための教育機関になってしまってるけど、オルタナティブスクールに通わせることができるなら、子どもの頃から授業の中で大人と喋ることが多かったり、農業の世界に触れることもある。うちの子はそういうたくさんの方とのコミュニケーションの中で大きくなって欲しい。教育が、今の大学生にもたらしたものを逆算して、さあ、大人たちは若者たちのために何ができる？と考えないとあかん時代になっているのではと。

上村有里さん

ありがとうございます。

正垣律子さん

うちの子もめちゃくちゃ変わってまして、たぶん負けてない。小学校1年の時とかコミュ力抜群の子なんですよ。知らないおじさんが家にいるんですよ。私が帰ってくると「いやすみません、一緒に帰ろうと言われてまして」と。決して悪い地域ではないんですがそういう子やったんです。本がすごい大好きで、ずっと本を読んでもる子。みんな保育園で遊んでるところの真ん中で、隅っこじゃなくて。藤田さんの学校に行かせようと考えて、でもちょっと遠かったんです。学校が大好き、今の学校が大好きと。でもアホなんです。本が好きなのに赤点しか取ってこない(笑)

| | |
|---------------|--|
| | <p>生駒でいちばんのジャンボ校で、教育熱心の人たちがいっぱい住んでいるところなので 99.8%塾に行かせてる。うちの中3の秋まで塾に行かなかったんです。</p> |
| <p>中川悠さん</p> | <p>生駒って働いている世帯の7~8割ぐらいが大阪で働いているですよ。だから、大阪で働いている社員さんたちの教育概念がそのまま、まちに転換するんですよ。</p> |
| <p>正垣律子さん</p> | <p>ほんとに大変で。赤点しか取ってこない。でも、コミユカだけは抜群。体験の場にも小さい時によく連れて行ったんですけど、気付くと講師席にいるんです。登壇して話したす感じ（笑） 周りに良い子が多くて。うちの子は浮いているんですけど、この良い子たちこれからちゃんと生きていけるのかなとちょっと思います。 最近、大学のワークショップでいっしょにすることがあるんですけど、行政も若い子の意見を聞きたいと言うのでまちづくりのワークショップに大学生を呼ぶんですけど、良い子ちゃんの答えしか出てこない。大人が話してるのとあんまり変わらない。100点のものしか出さないみたい。そんなのは不安に感じますね。</p> |
| <p>中川悠さん</p> | <p>そうなんです。 僕たちは「感想の教育」と呼んでいるんですけど、小学校の頃から感想文を書くのは慣れてるんですね。 「とても良かったし、良い話を聞けました。今日はありがとうございました」と。僕たちは、その固定された表現をいかに崩すかに取り組みつづけています。 京都産業大学の非常勤講師をしているとき、文章を上手にさせてほしい無茶振りのワークショップがあったんです。「語彙が少ない」「本を読まない」とかあったんですが、実際に学生たちは歌の歌詞をいっぱい知ってる。映画も漫画も見てる。じっくり話していくと、語彙力がたくさんあることがわかってきました。実は、いろいろな表現を書ける能力は秘めているけれど、表現力のある文章を書ける場所が学校の課題レポートしかないってこともわかってきました。課題レポートって、文章が固いでしょう？だから、結局、秘めている力を発揮しないまま、「文章ってこういうマジメなものでしょう？」と思いながら、社会人になっていく。 ツイッターやLINEの影響も大きくて、「今、行きます」「遅れます」「どこ？」のような会話のテンポだから、接続詞を使う機会もあまり無い。私たちの日常生活では、語彙はあるけど、使う場所が本当に無いんです。</p> |

| | |
|--------|--|
| 上村有里さん | <p>今はデジタル時代でTikTokとかよく使ってますが、動画で映像にしちゃうと逆に言葉が育たない。そこがすごく不安だなあと思ったりします。藤田さんが「対話力」が大切だ伝えてくれましたが、そういう力を子どもたちが養っていくために工夫されていることや、心配になることはありますか？</p> |
| 藤田美保さん | <p>まず対話させるということが大事なので。基本的には対話させないんですよね学校って。対話する時間があまり無い。先生の話聞く時間はあるんだけど。子どもたちって、対話したことが無いんですね。とにかく対話することができるような設計にする。それで対話させる。子どもたちが、対話したことに関しては、大人がコントロールするとか対話させっぱなしではダメなので。本当に、対話したことを実現させるというか保証するという感じですね。「対話ごっこ」になると意味がないから。そういうことを、今の学校では、してこなさすぎるかなと。</p> <p>話がそれますが、スウェーデンの若者の政治参加をやっている研究者が私たちの学校の実践を聞かれたことがありました。その方があとから私におっしゃったことが衝撃的だったんです。「なぜスウェーデンの若者が政治参加をするのかがよく分かった」と言ったんです。「それは小さい時からこういう教育を受けているからですよ」とおっしゃって。その方は、若者の政治参加のところだけを見てたんだけど、もっと紐解けば小さい時から対話ができる。スウェーデンの学校教育では、対話ごっこじゃなくて本物の対話をして自分たちの生活を作っていくという経験をしていると。</p> <p>日本の学校教育って、それをあまりにもさせないんですよね、一般的には。「ごっこ」としてはあるけど。あくまで、対話ごっこでしかないですよ。</p> |
| 上村有里さん | <p>学校だけが対話の場というのがしんどいのかなと。昔は商店街を歩いていると、近所のおじちゃんおばちゃんが話しかけてくれたり、まちのあちこちに対話のチャンスがあったんじゃないかなと思うんです。</p> <p>正垣さんのお子さんがいろんなところに行っちゃうという話が出ていましたが、そういう機会がどんどん薄れてきていて、コロナでますます人との距離感が出てくる。</p> <p>議論するのは、争うというイメージだったり。戦っちゃダメです、正しいことを言いましょうみたいなところがすごく怖いなと思ったりします。地域の中で対話力を育むことをうまく育てていければいいなと思います。</p> |



正垣律子さん

それには、農園に来ていただけたら。
 子どもたちに何をしたいと聞くと、「これやりたい」「じゃあやろう」とすぐできるんですよ。
 子どもだけじゃなくて、サポーターさんも関わってくださっているんですけど、本当にやりたいことを実現させて。
 農法にはいろんなものがありますが、うちは何法でもなくて。
 やってみて、それがどうだったかを見てみよう。ダメだったら、次はこうしてみようみたいなゆるい感じでやると、みんなが納得するとか。
 そんな実践の場にできるのかなと思いますね。
 青虫を見るのが初めての親御さんも。ボランティアの人が踏みつけると、子どもたちは「え?」「踏んだ」「なんで殺すの」と。
 育てたいと持ち帰って、育ったら「モンキチョウだったよ」と教えてくれる。
 農園には実践の場がすごくたくさんあるんですね。興味を持ったことを実際にやってみて、それがかたちになる。そんな体験ができる場所なので、対話もそうだし体験もたくさん生まれる場所だと思います。

上村有里さん

自然に生まれてくる場所ということですね。
 中川さんの娘さんも妖怪の話でいろんな地域の方々に育てられてる。

中川悠さん

本当にそうですね。
 娘の目の前には、たくさんの個性あふれる大人たちがいて、例えば鬼太郎の世界ではコスプレイヤーがいたり、音楽の世界では歌を歌う人、楽器を演奏する人がいて…。彼女はコミュニケーション能力が高いので、子どもも大人も、みんな友達だと思ってますね。

| | |
|--------|---|
| | <p>今、教育について話をしていますが、市役所職員になって改めて痛感することは、学校の先生も市役所と関わっていくとめっちゃ忙しい。隙間がない。だから、学校教育を変えることは難しいし、どこまで可能性があるのかと常に考えてしまいます。</p> |
| 上村有里さん | <p>私たちが学校教育を変えるために投げかけられることはありますか？</p> |
| 正垣律子さん | <p>難しいですね。 学校教育はみんなが受けられるのでそこで環境を伝えてくれたらと思って、指導者向けの研修会を企画することがあるんですけど来てくれないんですよ。アンケートをとって「なぜ参加できないんですか？」と聞くと「科目に無いから」と。 「理科とか社会の科目に、学習指導要領に入れてくれたらやるけど、そこに環境は入ってないからできない。そんな時間はありません」と。 そう言われると、しゅんとなる。そうかあと。</p> |
| 中川悠さん | <p>淡路島での取り組みのキッカケになったのは、弥生時代の銅鐸が発見されたことなんです。僕はいろいろな取り組みの中で、小学校の先生に研修をする機会をいただいたんですよね。地域で銅鐸が発見されることが、いかに素晴らしいことか。2000年ぐらいの淡路島を思い描いてみようって。でも、受講している先生方に「歴史が好きな人は？」と聞くと、あまり手が挙がらないんです。そして、「歴史が嫌いな人は？」と聞くと7割ぐらい手を挙げる。 きっと、歴史の大切さを知らない先生や子どもたちが、いつかもし市長とかになった時に、「歴史は興味ないから予算を削減しよう」とかになるんじゃないかな。淡路島がね、弥生時代に朝廷に対して、重要な貢献し続けたから島の中に銅鐸があるという物語が、誰にも浸透しないことになってしまっているなあと。</p> |
| 上村有里さん | <p>どれもすごく大事。 「繋がっている」という藤田さんの言葉じゃないですけど、どれ1つとして切り離せるものではなくて、それぞれが繋がりをもってやっているということを大人の私たちが実感して何かを変えようという力に変えていかないと社会は変わらないかなと思います。</p> |
| 中川悠さん | <p>もし高校生が「大学になる時に歴史って必要ですか？」というのと、半分ぐらいが「受験に必要だから、必要です」と。本気で言うてる？みたいな。けっこうみんな本気で言うてはる。 人生にとって必要だとか暮らしに必要なだとか言う人は、ほぼいない。</p> |

| | |
|--------|--|
| 上村有里さん | <p>私たちが生きていく力をどう育てていくかがすごく大事なところだと思っているんですが。</p> <p>ここからは次のテーマに。</p> <p>今日のお題になっている「100年後の地球がどうなってほしいか」。</p> <p>皆さん100年後はなかなか想像しにくいと思いますが、子ども、孫、ひ孫のもう少し先かなと想像しながら、ゲストの皆さんに100年後の地球がどうなってほしいかを聞いてから、皆さんにも意見を投げかけていきたいと思いません。</p> |
| 正垣律子さん | <p>100年後が想像つかなさすぎて。</p> <p>100年前は明治？その頃から今のスマホの世界とかオンラインを想像できていたか？</p> <p>次の世代は全然思いつかないんですけど、やっぱり地球環境はきれいに残ってほしいな。</p> <p>子どもたちってすごく素直で、正義感に溢れているというか。</p> <p>農業分野からたくさんプラスチックが出ていて海の魚が困っている、という話をするとすごい敵みみたいな悪者をやっつけるみたいに、プラスチックのシートを剥がして頑張ってくれるんですよ。</p> <p>昨日もゴミ拾いのイベントがあったんですが、パッと見はゴミが落ちていないような公園でもタバコの吸殻とかをたくさん見つけてくれる。</p> <p>環境教育とかを考えて自分たちの行動に繋がると、それが連鎖して行って。大人より子どもたちのほうが基本的に学ぶ機会があると思うので、そんなことが続いていくと、今よりもうちょっと良い世界になるのかなと期待しています。</p> |
| 上村有里さん | <p>まずは、身近なところからですね。</p> <p>藤田さん、100年後どんな地球になってほしいと思いますか？</p> |
| 藤田美保さん | <p>どうなんでしょう。想像つかないんですけど、たぶんすごく便利になっているところは便利に。AIが発達するでしょうから。</p> <p>ドラえもんの世界みたいな感じになっているんですかね？人間がやらなくてもシューとロボットなどでできるところがある一方で、じゃあ人間はどうすればいいのかということになるのかなと。</p> <p>二極化みたいなことが進むんやろうな、進んでいくしかないんかなと。</p> <p>AIやハイテクになっていく部分と、逆に戻るみたいな。あえて不便なことをやろうとするみたいなところに良さがあるよねみたいな。</p> <p>田舎に暮らしながらめっちゃ便利みたいな感じとかが良いと思う人が増えるんかなと思うんですけど。</p> |

| | |
|--------|--|
| | <p>そうなると、そういう生活ができる人とできない人の格差が生まれやすいんじゃないかな。</p> <p>ある程度の収入があってアンテナが高い人はそういう生活ができるけど、そうじゃない人たちはAIに仕事を取られてるだろうし、居場所がないというか。そういう問題もすごく大きくなってんじゃないかなと思いますね。</p> |
| 上村有里さん | <p>今の課題がもっと深くなってしまっているんじゃないか、ということですかね。</p> |
| 藤田美保さん | <p>生きづらさを抱える人がすごく増えちゃうんじゃないかなと。いろんなことが二極化していくというか。</p> |
| 上村有里さん | <p>格差が広がっちゃうということですかね。 中川さんはどんな100年後をイメージしますか？</p> |
| 中川悠さん | <p>2100年を紐解くと、人口は5000万から3500万まで下がるらしいです。市役所でお仕事をさせてもらっていると、高齢化の先を見越してはったりするんですね。今から30年経つと65歳が95歳。その方々がすでに生きていない時代になっていくというか。生々しい話ですが。</p> <p>人口が大きく減って、2100年の段階では、5000万人もしくは今の3分の1ぐらいになってしまう。</p> <p>ちょっと話が逸れますが、僕は弥生時代の勉強を淡路島日本遺産のプロジェクトの中でしてきたんです。2000年前も今もそうですが、日本は水が良いんですよ。水があるから野菜が育つ。それは海外では、どこの国でも当たり前のようにあることじゃないんです。</p> <p>白目の話じゃないですけど、将来的には、弥生時代のように助け合いのまちになっていくだろうと。</p> <p>極端な例えですが、白川郷のような閑散とした田舎町がまたできあがってくる。もちろん、都市は都市で人口が集中するんですが。</p> <p>3500万人ぐらいになり、超金持ちか普通の人たちになってしまうと、私たちは不便を受け入れていく。きっと、農業をし始める人も増えていく。</p> |
| 正垣律子さん | <p>子どもが生き残るには、芋と豆を栽培できる知識と技術を身に着けることやでと。</p> |
| 中川悠さん | <p>日本というまちは世界の中では小さくなっていくんですが、環境はものすごく強いので底力は絶対あるんですよ。</p> <p>簡単には無くならないまちだと思っています。</p> |

ITが不便さを解決する可能性もありますが、家は都市部に集中するか閑散とするかのどっちかしか方法がない。そうすると不便やなあ遠いなあとか思いながら。水があるな、育ててみようとか。

助け合いが逆に増えていかないといけないのは自然になっていく。

大人たちは何をするかというと、関係人口じゃないけど子どもたちに仕事の話をして絶対しないじゃなくて、伝えていかんと思うし、開放していかないとあかんと思う。

おっちゃんおばちゃんに関わっていくみたいなことをしないと。

それが弥生時代なんですよ。めっちゃ戦争多いんですけど。

助け合わないと生きていけない。良い未来があるかもよ。

上村有里さん

不便だけど助け合うことでシンプルになっていく。ミニマムな生活を受け入れていく社会になるんじゃないかというゲスト3人のご意見でした。

3分間だけお近くの方とお話する時間をとりたいと思います。

まだまだ盛り上がっていますが参加者からご意見を聞きたいと思います。



参加者 1

興味があって来たんですけど、2030年では遅いんです。

2025年にすごいことが起きてみんなおかしくなっちゃう。亡くなる人が多くて。自分の考えで自然に生きてる人が生き残って。

弥生時代そういう考えできたのになんで日本人は独自の考え方をしないで。令和になったら日本自体の考えを言わないと。

これからはウイルスとの戦いになると思うんです。

今まで人類がここまで生きてこれたのは、自然治癒力がいちばんらしいんです。考えなくていいんです。自然に任せておけば人類はうまくいくと。

100年前のウイルスにはワクチンが無くて。1人1人が自然と共に生きることが地球の存続。100年じゃなくて身近に来てるんですよ。

お金じゃなくて心の世界になってくると思うんです。

1人1人の命が輝く未来社会に。

| | |
|--------|--|
| 参加者 2 | <p>今年で 80 歳になりますが、私が仕事をしだした頃と現在の仕事はまるつきり違う。私の頃の仕事はほとんどありません。</p> <p>100 年後は今の仕事みんな無くなると思う。完全に仕事が変わります。</p> <p>正垣さんのお子さんは学校が好きだと言われましたね。中川さんのお子さんは変わっていると。そういう子どもが将来、知恵や工夫をして世界に出て行って仕事をする気がします。</p> <p>学校教育がどう変わっていくか分かりませんが、変えていくのはその通りだと思います。将来はまるつきり中身が変わってしまうと思います。</p> |
| 中川悠さん | <p>その通りだと思います。</p> <p>事前に控え室で話してたのは、日本脱出でええんやろかって話。</p> <p>日本が持っている地の力というか、人々が持っている力も守らないといけない。世界に羽ばたいていっても、帰ってくるだけの土地の力があるような気がします。</p> <p>それは水の世界、土の世界です。大事なことだと思います。</p> |
| 上村有里さん | <p>貴重なご意見ありがとうございました。</p> <p>今日のディスカッションを受けて、ぜひパネラーの皆さんから最後に一言ずつ、いろんな思いがあると思いますが、これから生き抜いていく、これからの子どもたちが生きていくのに必要な力というメッセージをいただきたいと思います。</p> |
| 中川悠さん | <p>また、新しい取り組みの話になってしまうのですが、経済産業省の関西版である近畿経済産業局さんと地域を活性化させるためのキーパーソンを 30 人ぐらい取材していて。共通項はなんだろうかと。</p> <p>いろいろ話し合ったのですが、残ったのは 2 つ。</p> <p>1 つ目は「もったいないと思えるか」その建物をもったいないと思えるか。まちの商業施設が無くなるのももったいないと思えるか。おじいちゃんおばあちゃんが持っていた大切な写真をもったいないと思えるか。</p> <p>だいたいまちづくりをやってる人は「もったいない」と言うんです。</p> <p>でも、例えば、古民家や町家を親の遺産で引き継いだ子どもたちは、壊す時にもったいないと思わないんですよ。お金もかかるし、維持管理の手間がかかる。でも、生きていた人の歴史や思い出を語り続けると、やっぱり「もったいない」と思ってくれる気持ちが芽生えてくることもある。</p> <p>まず地域の方々が残すべきものをもったいないと思えるかはけっこう大きな違いだと。</p> <p>もうひとつは「お節介」。あの人は困っているな、手助けするべきかな。あの人は寂しそうだな、何か届けてあげようかな。</p> <p>そういう気持ちを持たないと、人はどんどん孤立してしまう。</p> |

| | |
|---------------|--|
| <p>上村有里さん</p> | <p>我々はもっとお節介であるべきだと思う。 「もったいないと思える人になろう」、より多く一步を踏み出して「お節介なおっちゃんおばちゃんになろう」というのが、これからの私たちのまちを 持続させるための大事な2つの要素だと。</p> <p>ありがとうございます。「うざい」なんて言われそうですが、そんな存在 も大事ですよ。では、正垣さんお願いします。</p> |
| <p>正垣律子さん</p> | <p>生きていく力は、芋と豆だと思えますけど（笑） 「あわい農園」の「あわい」には人と人の間とか自然と人との間、時間的な 間とかそういうものが繋がるような場所になってくれたらいいなと「あわい 農園」と名付けました。 人たちが繋がる場所がやっぱり必要だと思います。それが農園だったりオル タナティブスクールだったり。学校の現場でもそうですが、そんな繋がりが 地域や人とか考え方、いろんな人が繋がるような場所を作っていくことが今 後やっていきたい仕事かなと感じたフォーラムでした。</p> |
| <p>藤田美保さん</p> | <p>やったもん勝ち、なんかなと最近思ってた。 これやってみようかなとか思った時に、でもなあとか思うじゃないですか。 周りを見ると、「え？そんなことやるん？」という人いませんか？ そういう人を見ると、やったもん勝ちやなって。周りからどう思われても。 最近、知り合いの70代女性が外国人に日本語を教えるは優しいような人 が、まさかそんなことすると思わなかったんですけど、ある日「私ライブを やります」って。 若い子がライブやるのわかるんですけど、70代のおばさんが。どう見ても 普通の優しい方がライブやりますと。 川西能勢口のジャズバーでやるから聞きに来てくださいと。 それを見た時に「すごいな〜。やったもん勝ちやな」と思ったんです。 未来のために何かをせなとか思うよりも、とにかく今を楽しむということ いいのかな。今やりたいことをやってみるみたいな。 こんなんやったらかっこ悪いとか、こんなんやったら誰かからなんか言われ るんちゃうかというのは無くてもいい。 忙しいからあんまりママ友がいないんですが、唯一のママ友がいてて。 彼女がある日突然タイル研究家になったんですね。 ずっとタイルが好きで、あちこちのタイルをインスタやブログとかにあげて たら編集者から声をかけられて本を出すように。ただの主婦ですよ。 ただの主婦なのに台湾に日本のタイルがすごいのに放置されてるとかで、そ れを日本の美術館に展示するんだということで、いろんな美術館と交渉し て、美術館の学芸員を説得して展示会をしたりして。</p> |

その人のパワーがすごいなど。誰からも認めてもらえてなくてもやるんですよ、その人。

やったもん勝ちなので、難しいことを考えずにやりたいことをやるのがいちばん良いんじゃないかなと。誰からどう見られても構わないので、やりたいことをやりましょう。

上村有里さん

回り回って自分が心地よく生きていくことが大事かな。それがきっとSDGsに繋がるんだなとゲストのお話で感じました。

藤田さんが「自分の力を高めて元気になると自然と誰かのために何かをやるようになっていく」と子どものようすを伝えてくださいましたが、きっと私たちもまず自分が満たされることがいちばんで、満たされていないのに誰かのためや未来のために思うのは順番が違うのかもしれないと、今日のお話で学びました。

SDGsは私たち1人1人が望む未来を、まず自分から実現していくことだなということがよく分かりましたし、そこをみんなで目指すためのゴール。

2030年じゃ遅いと言われましたが、まさにその通りで今日から明日からまず自分を満足させ、そこが満たされたら次に何かできることを、地域で愛着を持ってお節介を繋げていくことが大事ではないかなと感じました。

とても素敵なお話をありがとうございました。

パネラーの皆さんに大きな拍手をお願いいたします。

司会者

上村さん、登壇者の皆さん、ありがとうございました。

それではお時間になりましたので、これで終了とさせていただきます。

登壇者の皆さんに今いちど大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。本日はご参加ありがとうございました。



認定NPO法人コクレオの森について

● 法人の概要と事業内容

| | |
|----------|--|
| ① こどもの森 | 小・中学部の学校運営、民主的な市民性教育・持続可能な開発のための教育(ESD)の実践 対象：小・中学生 |
| ② こそだての森 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 里山親子クラス・里山小学生クラス：子どもと大人の自己肯定感を里山で育む教室 ▶ 子育てカフェ：子育てハッピーアドバイス講座 ▶ 豊能町子そだて広場（業務委託） |
| ③ おとなの森 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 教育カフェ：教育・子育て・まちづくりに関するの市民熟識 ▶ 学びの場コーディネーター Manabee：子どもの主体性・市民性を育む学び場コーディネーター養成プログラム |
| ④ ミライの森 | <ul style="list-style-type: none"> ▶ 一日がっこ里山ロハス：環境に配慮したくらしを考えるイベント ▶ 持続可能なまちづくりの支援活動 ▶ 学校創りのサポート（サスマナ） ▶ 川西市黒川里山センター（指定管理） |



- ◆ 沿革
 - ▶ 1999年10月 「大阪に新しい学校を創る会」設立
 - ▶ 2004年4月 箕面市箕面4丁目に「わくわく子ども学校」開校
 - ▶ 2009年4月 箕面市小野原西6丁目に校舎移転。法人名と校名を「箕面こどもの森学園」と改称
 - ▶ 2015年1月 UNESCOからユネスコスクールに認証される
 - ▶ 2015年10月 認定NPO法人の認定を受ける
 - ▶ 2016年10月 文部科学省委託事業のESD重点校に選ばれる
 - ▶ 2019年4月 UNESCOバンコクから、HAPPY SCHOOLに選ばれる
 - ▶ 2021年3月 豊能町子そだて広場「だんでらいおん」業務委託
 - ▶ 2023年4月 川西市黒川里山センター 指定管理
- ◆ 生徒数（箕面こどもの森学園）
 - ▶ 小学部 定員48名 中学部 定員20名（待機児童生徒110名）
- ◆ 書籍
 - ▶ 「こんな学校あったらいいな ～小さな学校の大きな挑戦～」
 - ▶ 「みんなで創るミライの学校 ～21世紀の学びのカタチ～」

◆ 藤田美保プロフィール

- ▶ 『窓ぎわのトットちゃん』を読み、自由な学校に憧れる。小学校教諭を退職後、大学院に進学。同時期に市民による学校づくりを目指す。2004年に「わくわく子ども学校」（現：箕面こどもの森学園）常勤スタッフ、2009年から箕面こどもの森学園校長。2022年より認定NPO法人コクレオの森代表理事。現在は、ESDの学校を中心とするSDGsのまちづくりを目指す。

NPO法人とよなかESDネットワークの取り組み紹介



ESDってどんなこと?

1

自らが、体験し
感じ、考え
行動する
体験型の学び合い

2

地域で
さまざまな
行動をはじめ

3

地球上の
いろいろな問題
とつながっている

ESD＝持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）
環境・経済・文化のバランスがとれた、子どもや孫の世代も安心して暮らせる
未来を目指し、行動する人を育て、社会をつくるための学び合いのことです



子どもの居場所
ネットワーク事業



おもろ荘学習生活支援



ちやふだい集会
(豊中市立市民公益活動支援センター)



高校生対象
ライフデザイン講座



とよなか地域創生塾
運営スタッフ

- ・学校や地域、市民向けに多様な「学びの場」づくりをサポートしています。
- ・さまざまな体験を通じた「学び合い」や「気づき」から、未来をつくる「ひと」を育むための出前授業や講座、研修などを行っています。



協力企業・団体はこちらからご覧いただけます
<https://www.awai-farm.com/cooperation-list/>



食と農から未来を変える
 SDGsアクション



@awai_farm



awainouen



【主催・運営】

【一財】環境事業協会

大阪市中央区南船場1丁目16-13 堺筋ベストビル9階

大和リース(株)鶴見緑地パークセンター

大阪市鶴見区緑地公園2-163

【ホームページ】

最新情報はこちらから

<https://www.awai-farm.com>



【お問い合わせ】(一財)環境事業協会

TEL 06-6121-6407 (月～金 9:00～17:30)

Email: info@awai-farm.com

ひと・もの・ことの「あわい」にある農園



SDGs自然農園事業

(一財)環境事業協会

食と農から 未来を変える

食と農で未来を変えることに可能性を感じて、
 まちなかの公園にSDGs自然農園「あわい農園」を開園しました。

あわい農園では、
 これまで土やいきものに触れる機会の少なかった子どもたちが、
 農園体験を通して、食と農・自然環境・都市の循環を学び、
 「未来を生きる力」をはぐくんでいきます。

日々の農園の管理は、さまざまな人が担い手になります。
 ボランティア・企業・支援団体など、地域のステークホルダーが参画、
 生活や仕事に就くことに不安を抱える方を支援する機関と連携し
 社会的弱者の「はたらく支援」につなげます。

農と福祉の「あわい(間)」にある農園。
 大地に触れ、自然を肌で感じることで
 みんなが元気になる農園をめざしています。

あわい農園の由来

間と書いて「あわい」。
 「あわい」という言葉には「物と物のあいだ」、
 「事と事の時間的なあいだ」、「人と人のあいだ
 から」といったさまざまな意味があります。

- ・種をまき、作物が実るまでの変化に気づき、
季節の移り変わりが楽しみになる農園
- ・さまざまな事情を抱える人が
地域とふれあえるきっかけになる農園
- ・SDGs活動や農業・自然体験を通して、
さまざまな「あわい」が生まれる農園
になるよう想いを込めて名づけました。



あわい農園 ってどんなところ？

あわい農園では、

- ① 都市の循環農
- ② こども食堂支援
- ③ はたらく支援

の3つのSDGsアクションで地域の未来をはぐくみます。



これまでの活動



参加者の声

年間を通しての農作業にぜひ親子で参加したい

野菜などを育てること、収穫すること、それを調理して食べることが繋がっていない幼い息子にとって、自然体験、原体験をさせるとてもいい機会になりました。

わたし自身もたいへん勉強になるイベントでした

息子も最初は乗り気ではなかったものの、収穫や生き物とのふれあいを楽しんでいます。わたし自身も野菜を育てることを通じて、自然と人間との繋がりをSDGsの活動を学べました。

自分なりにやり切った感がありました

夏の暑い日の農作業は大変でしたが、季節のたびに変わる農場の風景がどうなっているか気になっていました。子どもたちの楽しそうな姿が見れてよかったです。

新しいつながりができたことがよかったです

同じ目標に向かって、とても楽しく作業することができました。農作業の精神的効果を感じました。今後も新しい出会いがあることを思うとかべ、がんばりたい。

農園サポーター制度について

あわい農園では農園の運営を平伝っていただけるサポーターを募集しています。「脱プラスチック」・「有機栽培」・「野菜づくり」に関する講座を受けていただいた方を農園サポーターとして認定します。
※詳しくは(一財)環境事業協会へお問い合わせください。

○歴史×観光



観光戦略・地域教育
プロデュース
文化庁 淡路島日本遺産
観光促進プロジェクト
淡路島日本遺産
(2016~)

○商店街×移住促進



商店街アドバイザー
淡路島の商店街を
地域みんなで活性
よりあいいそとまち
SUMOTO
(2018~)

○都市農業×農家支援



農家と新規ビジネスを立案・運営
大阪市内の野菜農家×大阪市役所の有志
×種子製造企業×障がい者福祉
大阪市内でのイタリア野菜
「おあさかイタリア野菜研究ラボ」(2020~)
※2022年4月・5月、NHK「ほっと関西」放送
※熱湯放送「TEN」放送

○団地×高齢化×障がい者支援



高齢者の孤食が多い大阪市住吉区の団地で
障がい者が運営するランチ食堂を運営
杉本町みんな食堂 (2018~)

○企業の障がい者雇用×ソーシャルビジネス



障がい者福祉



○市役所でのプロ人材



副業・テレワークOK。
生駒市を変えるプロ人材
7職種募集。
奈良県生駒市役所 プロ人材として勤務
コミュニティーデザイナー(2022~)

○大阪ガス×社内へのCSR



大阪ガス 社内CSRコーディネーター
ソーシャルデザイン
フォーラム (2019~)

○大阪ガス×寄付活動



寄付団体の選定・取材・発信
大阪ガス 社会貢献団体への寄付支援
ソーシャルデザイン+
(2022~)

○経済産業省×地域活性



関西の仕掛け人を発掘・取材
経済産業省 近畿経済産業局
関西から「キーパーソン」
を考える会 (2020~)

○大学での講師

- 関西大学 人間健康学部 (2017~)
社会起業論/雇用政策
- 近畿大学 文芸学部 文化デザイン学科 (2018~)
アートプロデュース論A
- 大阪芸術大学 デザイン学部 (2021~)
ソーシャルデザイン

○新聞・書籍・シンポジウム



毎日新聞 月1連載
「あしたに、ちやれんじ」(2018~)

大阪万博に向け、連続登場
日経SDGsフェス大阪・関西
(2020・2021・2022)



新聞取材をまとめた書籍を出版
SDGs時代のソーシャル
ビジネスが私たちの未来を変える
(SDGs 経済出版)



【発行】豊中市 市民協働部 千里地域連携センター



令和5年(2023年)3月31日